

糸井文庫から見える丹後伝説の享受史

畠 恵里子¹

要旨：丹後地域には、超自然的存在が鍵となる著名な伝説が多い。日本精神史の一端の解明へと繋がるため、これらの伝説の分析は日本文学及び日本文化を探る上で重要である。その丹後地域に関する文化財の集積が糸井文庫である。未整理の資料を分析すれば、江戸時代後期から明治時代初期にわたる伝説の享受の実態を把握できる。

キーワード：糸井文庫、丹後地域、浦島伝説、天女伝説

1.はじめに

丹後地域は、大江山の酒呑童子伝説あるいは浦島伝説をはじめ、現在も全国的に著名な古典文学や伝承が多いという特徴を持つ。日本文学・日本文化の核を探る上で見過ごせない要素である。その丹後地域に関する文化財の集積が、糸井文庫である。

糸井文庫には、主に江戸時代後期から明治時代初期にかけた丹後地域関連の資料が約 2200 点収蔵されている。京都府与謝郡出身の糸井仙之助（1874～1949 年）が蒐集した古文書や錦絵である。1949 年より舞鶴市指定文化財とされ、現在は舞鶴市郷土資料館に保管されている。特に、大江山・浦島太郎・山椒大夫に関する資料は国内屈指とされている。およそその内容は、以下のとおりである¹⁾。

一 丹後国内伝説に関する資料

- (一) 大江山酒呑童子伝記
- (二) 水之江浦島太郎伝説
- (三) 由良湊三庄大夫伝記
- (四) 石川五右エ門伝説
- (五) 岩見重太郎伝説
- (六) 静御前伝説
- (七) その他丹後国内諸伝説

二 丹後国内俳諧史資料

- (一) 丹後未遊俳人の丹後地方を主題とする著書
- (二) 三丹地方行脚俳人の記念著書
- (三) 丹後古俳人の著書
- (四) 明治以降丹後俳人の著書
- (五) 丹後俳人の寄合発句並に俳諧の歌仙・扇面
- (六) 丹後俳人の書翰・俳諧摺物（新鑑）短冊
- (七) 他国俳人の丹後関係著書
- (八) 諸国俳人より送れる書翰・俳諧摺物
並に諸国俳人の丹後に遺せし短冊

三 丹後に関する狂歌・和歌の資料

- (一) 丹後に関する狂歌の資料
- (二) 丹後に関する和歌の資料

四 丹後国諸家の著書・伝記・墨蹟・資料

- (一) 丹後旧藩主の著書・墨蹟・資料
- (二) 澤邊北溟の自筆・稿本・著書・墨蹟・資料
- (三) 小室信介の著書・伝記・資料
- (四) 新宮涼庭一家の著書・伝記・墨蹟・資料
- (五) 野田笛浦の著書・墨蹟・資料
- (六) 嶺田楓江の著書・伝記・遺品・墨蹟・資料
- (七) 増山守正の著書・資料
- (八) 奥三郡諸家の詩文集・墨蹟・資料
- (九) その他丹後諸家著書・資料
- (一〇) その他丹後諸家伝記・資料
- (一一) その他諸家の遺墨・資料

五 丹後国名所記・絵図・地図旅行記・資料

- (一) 丹後国名所記・資料
- (二) 丹後国名所図・錦絵・摺物・地図・資料
- (三) 丹後国内旅行記

六 丹後国歴史地理の資料

- (一) 丹後国全般の資料
- (二) 加佐郡の資料
- (三) 奥三郡の資料
- (四) 与謝郡の資料
- (五) 旧宮津藩・本庄家の資料
- (六) 丹後国経済上の資料
- (七) 丹後国古文書の資料
- (八) 丹後国土俗工芸の資料

たとえば、一（一）は、「大江山酒呑童子伝記」との表記のみであるのだが、その内容は、「前期読み本、伽草子・金平本・六段本、黒本・黄表紙、往来本・合本・豆本、絵本、謡曲・淨瑠璃（丸本）諸節本、伝写・物語本類、後期読み本、摺物、絵巻物、錦絵類」と多岐にわたる。このように、糸井文庫には、伝説をはじめ丹後に関する文学・文化情報が集積している。

1 舞鶴工業高等専門学校 人文科学部門 准教授

ところが、古典籍の宝庫として一定の学術的価値を認識されている一方、糸井文庫には翻刻が未着手の資料が多く、内容精査の段階には至っていないというのが現状である。

国文学研究資料館は、日本古典資料調査DBに1984年から1985年の糸井文庫調査を公開している²⁾。書誌情報126件、翻刻はない。2002年、舞鶴市が学術協定を結んでいる立命館大学アート・リサーチセンターが赤間亮の指揮のもとに制作した糸井文庫閲覧システムDBは極めて画期的であり、舞鶴市のHPと連結しているため利便性が高い³⁾。翻刻はないのだが、簡易な説明が付されている⁴⁾。2006年から2015年における東京学芸大学の黒石陽子を代表者とする初期草双紙研究（科研費基盤C）の翻刻実績は、糸井文庫蔵の大江山伝説全190点のうち7点である。重松明久⁵⁾や三舟隆之⁶⁾も、糸井文庫の浦島関連の資料に触れているが数点である。

膨大な資料群であるため、全体的な整理には相応の時間と労力とが求められるが、少なくとも著名な伝説に限っても集中的に分析し、内容を精査する必要があろう。それによって、江戸時代から明治時代における各伝説の享受の様相が解明できるからである。

ことに、浦島伝説については、江戸時代の伝説浸透の実態を掴む手掛かりとなる。浦島伝説の版本に関する分析は、明治期国定教科書による国内伝播に先行した「物語の大衆化」の考察には不可欠であると、三浦佑之は指摘している⁷⁾。すなわち、現代の我々が浦島伝説を認知している素地は近世に遡及しうるのであり、糸井文庫を精査すればそれがより明らかとされる。通史的な集積による林晃平の精力的な論考もあるが⁸⁾、中世の御伽草子『浦島太郎』を中心とする。したがって、糸井文庫の資料分析には、近世の浦島享受史の解明という課題を、ある程度は補填できる見込みがあるのである。

この調査にはさらなる利点が見込まれる。それは、日本人が抱く異界観の一端を解明できる可能性がある点である。

大江山伝説に登場する酒呑童子や鬼、浦島伝説の乙姫や竜宮城の人々、『丹後風土記逸文』の天女など、丹後を舞台とする伝説には超自然的存在が鍵となるものが多い。そのため、江戸時代後期から明治時代初期における超自然的存在の享受の実態が、まずは解明できる。次いで、それを基盤に、古代に遡り近代にかけた通史的な異界表現の変遷が分析できる。すなわち、日本人の異界観が、ひいては宗教観の一端が判明できる見込みがある。

近世文学には著名な古典文学のパロディが多く、宗教観といつても質は異なるため、対比には慎重でなくてはならない。だが、換言すれば、それだけ

衆に古典文学が浸透していることになるのだから、両者を厳密に区別するのも早計であろう。その意味においても、糸井文庫は大きな可能性を秘めている。

何より、現在も国内で広く愛好され享受されてきた伝説を多数抱える糸井文庫の総合的整理は早急に着手すべきであるし、現在を生きる我々は、これらの貴重な資料を後世へ正しく伝える責務があるのであるまい。

その作業仮説に入るための前段階として、本稿では、糸井文庫に収められている丹後地域の伝説の紹介とごく簡単な整理とを行う。なお、本来ならば、「伝説」という言葉はタームとして定義付けをした上で使用しなくてはなるまいが、本稿は、糸井文庫の目録の表現を鑑み、ひとまず「伝説」と表記する。

2. 丹後地域を舞台とする伝説

先に挙げた「一 丹後国内伝説に関する資料」には、大江山伝説、浦島伝説、山椒大夫伝説などが配置されているが、「五 丹後国名所記・絵図・地図旅行記・資料」も概観して広くとらえた場合、以下の五つが、丹後地域を舞台とする主な伝説と認識できる。おおむね成立順に記す。

一つ目は天女伝説である。全国に点在している天女伝説の中でも最古の記録を持つ。のみならず、公の地誌にあたる『丹後風土記逸文』では筆頭に挙がっている。山頂の眞名井（まない）で沐浴中、老夫婦に衣を隠されて天へ戻ることができなくなった天女は、老夫婦に乞われて仕方なく「兒」（467頁）となる。天女の靈力の込められた酒造によって莫大な富がもたらされたものの、後に、老夫婦から「吾が兒にあらず」（467頁）との理由によって放逐された。激しく慟哭し流浪する天女だが、逢着した奈具の村で心が穏やかになり、穀物神である豊宇賀能賣命（とようかのめのみこと）（468頁）、すなわち豊受神として社に祀られるという結末を持つ。なお、伊勢神宮の外宮の神もある。

二つ目は天橋立伝説である。『丹後風土記』に次いで所収されており、糸井文庫では名所記の項目に配置されている。「國生みましし大神」（470頁）、すなわちイザナギノミコトが、「天に通ひ行でまさむとして、椅を作り立て」（470頁）たために、「天橋立」という名が付けられたという。イザナギノミコトの睡眠中、天に架けるべき垂直の橋が倒れ、現在のような水平の形状の砂浜になった。倒れた理由は「久志備（くしひ）ますこと」（470頁）という。日本古典文学大系頭注によれば、「久志備ます」とは「クシ（靈妙）の動詞形であり、天に立てかけてあった橋が海上の砂浜になったとして、そこに靈威のはたらきを認めたものという。

三つ目は浦島伝説である。『丹後国風土記逸文』の最後に所収されている。無論、浦島伝説は横浜など全国に点在しているため、丹後に限定されるものではない。だが、『丹後国風土記逸文』という最古の記録及び詳細な内容を持つ点において、丹後の浦島伝説は看過できない存在である。その他にも、『万葉集』巻9・1740番歌、1741番歌、『日本書紀』「雄略天皇22年7月条」など、丹後の浦島伝説の類話が見られる。その後も『浦島子伝』や『続浦島子伝記』が成立している。丹後の浦島伝説の由緒正しい正当性を標榜するのは書物だけではない。『延喜式』巻10「神名帳」に記録されている京都府与謝郡の宇良(うら)神社や京都府竹野郡の網野神社は、現在も浦島太郎を祀る。

四つ目は大江山伝説である。源頼光による酒呑童子の退治の舞台として著名であり、中世には御伽草子の『酒呑童子』や謡曲の『大江山』が成立している。ただし、丹後の大江山は、京都の大江山との混同がしばしば指摘されている。大江山といえば、まずは京都市や京都府亀岡市の付近にあたる大江山を意味し、次いで丹後の大江山が挙げられるためである。

五つ目は山椒大夫伝説である。人買いに欺かれて母親と引き離され、奴婢に身を落とした弟君と姉君とに焦点が当てられている。地蔵菩薩の加護のもとに成人した弟君が、人買いの元締である山椒大夫一族に報復を行うという展開となる。森鷗外は報復場面に大きく手を加え、盲目の老母と息子とが涙ながらに偶然再会するという結末を押し出した。歌舞伎の演目を描く錦絵が糸井文庫には多数残されているが、そこには、鶏娘(とりむすめ)と呼ばれる山椒大夫のむすめがしばしば描かれている。淨瑠璃や歌舞伎独自の人物である。

さて、これらの伝説を概観すると、注意しておきたい特徴が二つ浮かび上がる。

一つ目は、古来より広く認知され、愛好されてきた伝説が多い点である。

特に浦島伝説・天女伝説・天橋立伝説の三点は、いずれも『丹後国風土記逸文』所収であり、神話の世界と重ねられ、位置づけられてきた。同書に記録されている丹後国の伝説はこの三点のみである。逸文とはいえ、『丹後国風土記』という公的な書物に収められている重要性あるいは正当性は強調しておきたい。なお、天橋立は、江戸時代初期より、日本三景の一つとして陸奥の松島や安芸の宮島と並び称してきた。糸井文庫には、天橋立のみを描いた錦絵はもとより、これらと併せて描かれている錦絵も多数残されている。したがって、むしろ観光地もし

くは景勝地として伝播したと思われる。それ以前の時代においても、たとえば、『小倉百人一首』所収の小式部内侍の和歌、「大江山いくの道の遠ければまだふみもみず天の橋立」などをはじめとする歌枕としての歴史は、人々の認知に一役買ってきた。

大江山も鬼の住処として古来より認知してきた。浦島・天女の各伝説と同様、いや時にはそれ以上に、日本文学における存在感は大きい。先述のように、丹後地域独自の伝説と解するには注意が必要だが、ここでは、認知度の高さをひとまず確認しておきたい。

よって、丹後を舞台とするこれらの伝説は、やや大胆に言うならば、日本人の精神に刻み込まれている作品群と言いうるのではあるまいか。古来より伝わり現在も著名であるということは、時間を超えて後世に伝わり認知してきたということになる。そして、一地域にとどまらず全国的に伝播している。このように、時間・空間を超えて日本人に認知され、愛好されてきた伝説を多数有する土地が、丹後地域である点に留意しておきたいのである。

無論、三浦佑之が指摘しているように、丹後の浦島伝説を全国の浦島伝説の発祥地と断定するのは慎重とすべきである⁹⁾。しかしながら、「丹後の國の風土記に曰はく、與謝の郡、日置の里。此の里に筒川の村あり」(470~471頁)とあるように、丹後国の人物として明確に叙述されている点は十分意識しておくべきであり、その意味を踏まえておくべきではあるまいか。それは天女伝説でも、天橋立伝説でも、大江山伝説でも同様である。

伝説の発生に関する歴史的事実とは別に、これらの伝説は土地の孕むイメージとしばしば連結し、人々に浸透している。大江山伝説が好例であろう。歴史上の事実と、言葉が惹起する広がりとは、必ずしも同一ではないことには留意しておいてよい。

二つの特徴は、超自然的存在が鍵となり、作品の展開を力強く牽引している点である。

浦島伝説では乙姫が、天女伝説では天女が、天橋立伝説では神が、大江山では鬼が、山椒大夫伝説では仏が、それぞれに立ち現れる。

乙姫は竜宮城で浦島太郎を歓待し、玉手箱を与えた。それは、結果的には浦島太郎の寿命を操作する。天女は靈酒の売買を通じて富を与えた。それは、地名起源譚となるほどの富であった。大江山に棲む酒呑童子は人間を略奪し、鬼の惣領として人々を畏怖させた。錦絵では、掠られた姫君が山奥の川辺で洗濯をする姿や、源頼光と四天王らが酒呑童子の首を取る瞬間が、題材にされていることが多い。日本本土の創造神であるイザナギノミコトは、天に繋がりうる可能性を持っていた天橋立という靈力の満ちる

浜辺を造った。そうした中において山椒大夫伝説はそれほど目立たないが、守り本尊の地蔵菩薩はさりげなく要所で加護を与え続けている。このように、必ずしも全ての伝説に該当するとは限らないのだが、丹後地域とは、靈力を持った畏怖すべき存在と人間とが出逢い、接点を持つ空間として叙述されている場合が多い。

すなわち、古来より日本人の精神に刻み込まれ、かつ、超自然的存在と人間とが接点を持つ土地として、丹後地域を舞台とする伝説はしばしば語られているのである。

3. 糸井文庫の天女伝説と浦島伝説

五つの伝説の中でも、天女伝説・天橋立伝説・浦島伝説は『丹後国風土記逸文』に所収されているため、同じカテゴリーとなる。特に、天女伝説と浦島伝説とには共通項がある。

一つ目は、女性の性を持つ超自然的存在による呪物の贈与である。

乙姫は「玉匣（たまくしげ）」（473～475頁）を浦島太郎へ、天女は病を治癒する靈力の宿った酒を通じて、莫大な富を、繼父母的存在の老夫婦へ与えた¹⁰⁾。

二つ目は、天女と浦島太郎とが辿った経緯がほぼ反転する関係性にある点である。

天女は最終的には地上で神として祀られるが、希望していた天への帰還は不可能なままであった。浦島太郎は龍宮から地上へと戻るが、そこは、かつて自分が知っていた懐かしい地上の世界ではなかった。共に、本来いたはずの空間へ戻ることはできず、希望は叶わない。

すなわち、乙姫／天女、玉匣／靈酒という超自然的存在側の組み合わせを共通項に入れることができると、それだけではなく、天女／浦島太郎という主人公にあたる存在の組み合わせや、かれらが辿った異界／人間世界の経路からも、その類似性を読み取ることができる。

その他、慟哭し彷徨する天女が、靈夢を受けて伊勢神宮の外宮に迎えられ、その神となることによって正史に連結する点に着目した重松明久は、浦島太郎と天女とは対であり、宇治土公と猿女君との対に準ずる可能性があると指摘する¹¹⁾。そうであるならば、その面からも両伝説を共に検討する必要があろう。

そこで、両伝説にひとまず焦点を絞り、糸井文庫に収蔵されているものの一部を簡易に紹介する。

浦島伝説は全99点である。内訳は、「伽草紙・六段本・黒本」5点、「黄表紙・合巻」18点、「絵本・豆本」7点、「淨瑠璃(豆本)・読み本・絵図・絵巻物」24点、「人形・摺物・錦絵」45点である。



図1 「龍宮入り浦島」(舞鶴市蔵)

図1は、幕末から明治初期にかけて活躍した五雲亭貞秀の錦絵である。天保板の狂画であり、団扇の図案である。背面の龍宮城には神仙思想がうかがえる。中央では蛸が拍子をとり、左では鯛が亀へ酒を注いでいる。右奥では、浦島太郎が三味線を弾いている。



図2 「浦島と龍女」(舞鶴市蔵)

図2は、歌川国輝の錦絵である。文身離形、清水屋、弘化版である。右上に「和漢美男傳 浦島たらう、龍女」とある。

さて、「乙姫」ではなく「龍女」という記載であることに留意しておきたい。龍女といえば、一般的には、法華經に登場する著名な龍女成仏が想起される。

龍つまり獸に相当し、年齢も幼く、女性の身体という多くの障壁がありながらも、仏教への信仰心の深さから、男性の身体に変わり往生したと贊美される。いわゆる变成男子である。

すなわち、乙姫も龍女も、海龍王の娘ではあるが、両者は必ずしも同一人物ではなく、姉妹の可能性がある。

そもそも、現在の我々は、竜宮城にいる姫君といえば「乙姫」という呼称を持つ人物と思いがちであるが、必ずしもそうではない。仮に『丹後國風土記逸文』に限定してみても、「乙姫」という名ではない。しかも亀と一体化しており、「五色(いついろ)の龜」(471頁)がいわゆる乙姫へと化粧しているのである。五色の亀は、「婦人(をみな)」(471頁)、「女娘(をとめ)」(471頁)、「天上(あめ)の仙(ひじり)の家の人」(471頁)、「神女(かむをとめ)」(471頁)、「龜比賣」(かめひめ)(472頁)へと変ずる。したがって、乙姫の呼称は本来「乙姫」ではなく「亀比賣」、すなわち「亀姫」であった。

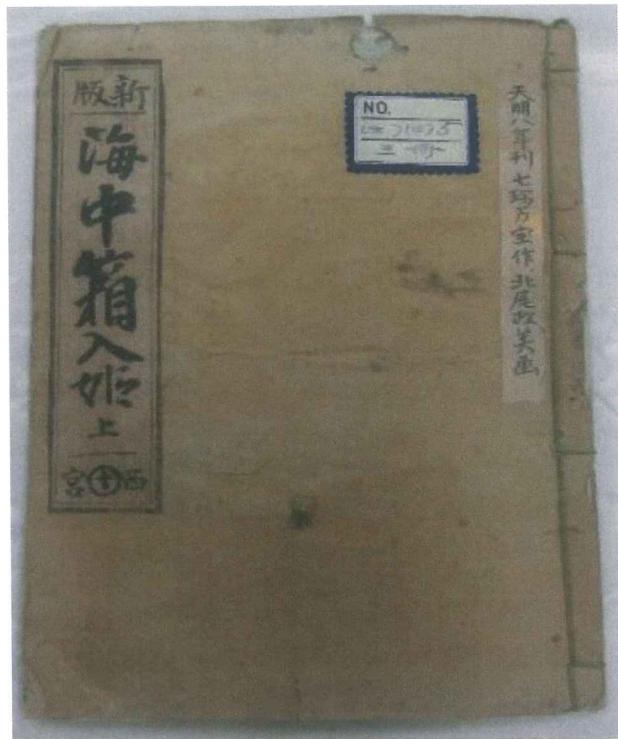


図3 「新版海中箱入姫」表紙（舞鶴市蔵）

図3は、『新版海中箱入姫』という題名であり、いかにも近世らしい題名のパロディ作品である。万象亭門人七珍万宝作、北尾政美画、黄表紙、天明八年板行である。浦島伝説をメインとしながら桃太郎伝説等が混交している内容である。



図4 「新版海中箱入姫」挿絵（舞鶴市蔵）



図5 「図4」拡大図（舞鶴市蔵）

図4、5の宝船には、右から、雉、犬、猿が乗船しており、中央に桃太郎の桃印の扇が見える。左には釣り竿を持っている浦島と乙姫とがいる。

さて、以上のように、浦島伝説に関する絵や読み物は多数あるが、天女に関する絵は管見の限り見当たらない。そのため、両伝説の浸透には質的相違があるかがえる。天女伝説に関する資料は「丹後國歴史地理資料」「寺社資料」全10点であるが、資料の再検討によって対象が増加する可能性はある。

4. 現地における伝説の浸透

ところで、丹後地域の人々の間では、これらの伝説は一体どのように受容されてきたのか。双方を併せることによって、現地の情報を加味することによって、紙面では気づけないものが立ち上がりてくる可能性がある。そこで、古典籍を基軸とした上で実地踏査をも行い、理解の深化の一助とする。

さて、丹後地域には複数の天女伝説がある。

一つ目は『丹後国風土記逸文』所収の天女伝説である。継子物語の萌芽であるが、話型としてはひとまず貴種流離譚に分類される。老夫婦に追放され、彷徨した後、心が落ち着いた天女は丹後で神として祀られて終結するためである。それは後に、伊勢神宮の外宮などへと連鎖していくため、大和政権への収斂と、政治と宗教との緊密な連携が見て取れる。その天女が舞い降りた土地として現地に伝わるのが、磯砂山（いさなごさん）である。

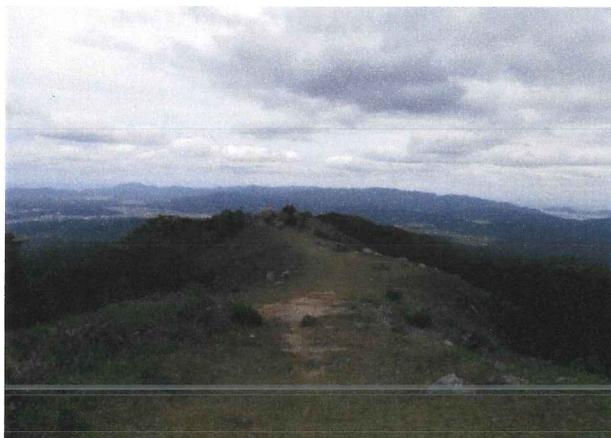


図6 「磯砂山山頂」（京丹後市峰山町、2015年10月撮影）

図6は、京都府京丹後市峰山町にある磯砂山の山頂である。そこでは空と山と海とが一体化し、周囲の国土を一望することができる。右手は舞鶴市や宮津市へと至り、左手は鳥取県へと至る。



図7 「女池」（京丹後市峰山町、2015年10月撮影）

図7は、磯砂山の山腹にある「女池（めいけ）」である。天女たちが水浴びをした泉であり、後に沼になったという。現在も水が浅く溜まり、沼のようになっている。ただし、「男池（おいけ）」という別の名称の池もあり、こちらのほうが本来の天女伝来の池であるという話も現地には伝わっている。

二つ目は、京都府京丹後市峰山町に伝わる天女伝説である¹²⁾。婚姻譚であり、かつ、七夕伝説と融合している。類話もあるが、およそその内容は以下のとおりである。

比治（ひぢ）の里に「さんねも」（三右衛門）という名の若い狩人が住んでいた。8人の天女の水浴びを見かけたさんねもは、羽衣1枚を隠してしまう。1人残った天女は乞うが、さんねもは返却しなかった。天女はさんねもの妻となり、3人の娘を産み、村人に機織や酒造や米作を教えた。ある時、羽衣を見つけた天女は、さんねもへ「7日7日に会いましょう」と言い残して天へ還ったが、天邪鬼が「7月7日に」と言い換えてしまった。さんねもは、手に残された夕顔の種を育てたところ、天に届くまでに成長した。それを登り、さんねもは天女と再会した。天女は「天の川に橋を架けて下さい。その作業が終了するまでは私を思い出さないで下さい。それができれば、再び一緒に暮らせます」と言った。作業は無事進んだが、完成間際、さんねもは7月7日が近いことから「また天女と暮らせる」とつい思ってしまった。すると、天の川は突然氾濫し、さんねもは下界に墮ちた。地上のさんねもは、比治山の山頂から天の川を眺めて悲しだった。村人は、天女の娘を祀るための神社を作った。それが乙女神社であり、参詣すれば美しい女の子を授かるという。以上が概要である。

現地には、天女の子孫という安達家が現在も伝わっている。乙女神社は図6、図7の近隣、京都府京丹後市峰山町にある。

さて、浦島伝説では、京都府与謝郡の宇良神社、及び、京都府竹野郡の網野神社が筆頭に挙げられる。『延喜式』によって歴史的な正当性が主張された神社である。

特に、宇良神社にはいくつかの宝物が保管されている。現存最古の『浦嶋明神縁起』（国指定重要文化財、室町時代）を筆頭に、「乙姫小袖」（国指定重要文化財、室町時代から江戸時代）、「玉手箱」（室町時代）が収められている。また、毎年3月及び8月には祭礼が行われている。



図8 「皺榎」(京丹後市網野町、2015年11月撮影)

図8は、京都府京丹後市網野町の「皺榎（しわえのき）」という木である。

浦島太郎の自宅跡とされている場所にある。地上に帰った浦島太郎は、玉手箱を開けたところ、老人となってしまった。そのため、悲しみと怒りとに震え、顔の皺をむしり取り木に投げつけたところ、木がしわだらけになったため、「皺榎」という名が付けられたという。巨大だが、10年程前に上陸した台風のために倒壊してしまい、現在は根元しか残っていない。その根元には、現在も空洞が残されている。

皺榎が抱えているこの空洞とその神性について、藤井貞和は社の発生を示唆している¹³⁾。古来、自然に生成した空洞は「うつほ」と呼ばれ、異界との接点になりうることが、日本古典文学の世界ではしばしば語られている。端的な例に、かぐや姫のいた竹の空洞が挙げられる。



図9 「釣溜」(京丹後市網野町、2015年11月撮影)

図9は、京都府京丹後市網野町にある「釣溜（つんだめ）」という岩場である。

浦島太郎が釣った魚を溜めていた場所であるという。近隣には島児（しまこ）神社がある。



図10 「龍穴」(与謝郡伊根町、2015年11月撮影)

図10は、京都府与謝郡伊根町の「龍穴（りゅうけつ）」である。

宇良神社のごく近辺の山道の、岩と岩との隙間にある、非常に小さな穴である。浦島太郎はこの穴を通って竜宮から地上へ戻ってきたという。

このように、現地には、ささやかではあるが多様な形をとり、天女伝説や浦島伝説が根を下ろしている。

5. おわりに

主に、江戸時代後期から明治時代初期にわたる丹後地域の文学資料を多数所蔵する糸井文庫を総合的に整理すれば、著名な作品の享受の実態を把握できる可能性がある。

特に、江戸時代の浦島享受史の課題を克服できる公算は高い。それは、江戸時代の文化流通の解明に繋がるであろうし、明治時代に国定教科書へ浦島伝説が採用された文化的な素地の一端も解明できる。何より、それは、浦島伝説を享受している現代の我々と、ひいては日本文化の解明と強固な関係にあるはずだ。

天女伝説の分析からは、彷徨する天女が神へ転換する経緯や、丹後地方と中央政権との往還関係が解明できる見込みがある。それは、宗教と政治との抜き差しならぬ関係性を炙り出す可能性を多分に孕んでいる。

そして、現地に伝わる両伝説のありかたは、それがどのように浸透してきたかを把握する一助となる。

丹後地域には超自然的存在が鍵となる伝説が多く、かつ、全国に普及している。したがって、これらを精査すれば、異界表現の変遷から日本人の異界観が把握できるのであり、日本精神史の一端の解明へと繋がる可能性を持つ。これが糸井文庫調査の最終的な目的である。

謝辞：糸井文庫の閲覧及び本稿への掲載を許可してくれた舞鶴市へ謝意をあらわす。

立命館大学教授・赤間亮氏、現地案内を引き受けてくれた小室智子氏及び矢野江美子氏、現地を確認するようサジェッションを与えてくれた詩人にして東京大学名誉教授・藤井貞和氏へ謝意をあらわす。

注

- 1) 糸井仙之助編『丹後郷土資料目録』(舞鶴市発行、1957年3月、改訂版：舞鶴市立西図書館発行、1983年3月)。同書はさらに詳しい区分によって整理されている。ただし、一部訂正が必要な箇所も見受けられる。
- 2) 国文学研究資料館HP、「日本古典資料調査DB」、「糸井文庫」検索結果、国文学研究資料館。
http://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/SCHSearch.cgi?DEF_XSL=default&SUM_KIND= CsvSummary&SUM_NUMBER=20&META_KIND=NOFRAME&IS_KIND=CsvInitSearch&IS_SCH=CSV&IS_STYLE=default&IS_TYPE=csv&DB_ID=G0000401SCH&GRP_ID=G0000401&IS_START=1&IS_EXTSCH=&IS_TAG_S1=SearchD ata&IS_KEY_S1=%E7%B3%8%E4%BA%95%E6%96%87%E5%BA%AB&IS_NUMBER=20 (2015年11月最終確認)。
- 3) 舞鶴市HP、「糸井文庫閲覧システム」、立命館大学アート・リサーチセンター制作、舞鶴市・立命館大学アート・リサーチセンター著作。
<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/maiduru/index.htm>. (2015年11月最終確認)。
- 4) デジタルアーカイブ化の経緯については、『アート・リサーチ 第5号』(立命館大学アート・リサーチセンター、2005年3月)に詳しい。
- 5) 重松明久『浦島子伝』(現代思想社、1981年)。
- 6) 三舟隆之『浦島太郎の日本史』(吉川弘文館、2009年)。
- 7) 三浦佑之『浦島太郎の文学史—恋愛小説の発生—』(五柳書院、1989年)。
- 8) 林晃平『浦島伝説の研究』(おうふう、2002年)。
- 9) 三浦佑之、7)前掲書。
- 10) 拙著『王朝継子物語と力—落穂物語からの視座—』(新典社研究草書212、2010年)。
- 11) 重松明久、5)前掲書。
- 12) 『丹後みねやま羽衣伝説』(京都府峰山町発行、1998年2月)。
- 13) 藤井貞和『釈迦空一詩の発生と「折口学」—私領域からの接近—』(国文社、1974年)。

『丹後国風土記逸文』は日本古典文学大系(岩波書店)による。

本稿は、「神話や風土記の丹後天女」(「郷土史公開講座 第5回(全5回)」、京都府舞鶴市主催、於舞鶴市西公民館、2015年10月)、及び、「糸井文庫の浦島伝説と天女伝説」(第40回情報科学センター講演会、舞鶴工業高等専門学校情報科学センター主催、於舞鶴工業高等専門学校、2015年12月)を踏まえた素描である。

(2015.11.30受付)

A HISTORY OF TANGO LEGENDS BASED ON ITOI BUNKO

Eriko HATA

ABSTRACT : There are many famous legends in which supernatural beings play a key role in the Tango Region. Because they lead to the elucidation of an aspect of Japanese spiritual history, they form an important factor in exploring Japanese literature and culture. Cultural heritage in the Tango Region is accumulated in ITOI BUNKO, or the ITOI Library. If we analyze unorganized materials and documents, we can understand the legends of the Tango Region from the late Edo period to the early Meiji period.

Key Words : ITOI BUNKO, the Tango Region, URASHIMA legends, TEN'NYO legends